

われる。

(二十四) 小野氏淡理の歌

三十二首の歌宴の最後は、冒頭の大式紀卿の挨拶の歌を見事に受けた、「挨拶」になり「長き春日」の歌宴の終了を宣言する。

まとめ

万葉集卷五梅花の宴の歌についての、これまでの考察から、この花宴が単なる歌の寄せ集めではなく、出席者達の協力によって成りたっていることが明らかにできたと思う。そしてこうした歌宴には冷ややかに処したと思われる山上憶良が歌会の形成に協力的であったことがわかった。またこうした回が「筑紫歌壇」と言われた和歌系の人たちの力だけではなく、漢文学の影響下に教養を積んできた所謂「漢学」系の人たちの力なしでは成立しなかったこともこの歌宴の出席者からわかった。

また単独の歌そのものの出来と、宴という集団の中での歌の出来が違うことも明らかにできたのではないかと思っている。今後はこうした花宴という文学がどのように継承されて言ったかを明らかにする必要がある。

平成十二年八月三十一日受理

837 大道 「庭」と「春の野」
 838 鉢麻呂 「梅の花散り乱ひたる岡びに」 外
 839 筑前目 「春の野に霧立ち渡り」 外

(十六) 大隅目楨氏鉢麻呂の歌

大道の歌を受け、歌は完全に外に飛び出してしまふ。単純に前の歌を受けるのではなく、前の歌が「我が家の園に梅が花咲く」と詠んだのに対して、「梅の花散り紛ひたる岡辺に」と対照させている。

(十七) 筑前目田氏真上の歌

国司の側から真上が登場する。彼も前の歌を受け「春の野に霧立ち渡り」ように舞い散る梅の花を詠む。庭から外に目を向けたこれらの歌は実景ではなく旅人が描いて見せた想像の世界である。

「雪」のごとく梅の花が散るといふ歌は次の通りである。

822 旅人 「天より雪の流れ来るかも」 梅が散る
 823 百代 「この城の山に雪は降りつつ」 雪が降る
 839 筑前守 「降る雪と見るまで」 梅が散る
 844 国堅 「妹が家に雪かも降ると」 梅が散る

(十八) 老岐目村氏彼方の歌

「春柳縵に折りし」と久しぶりに「柳」が登場する。この歌宴がまとまりのない、任意の寄せ集めでないことをこの歌などが証明している。外に向けられた歌をこの官邸に引き戻し、盃に散り落ちた梅の花を詠むことはこの宴も終わりに近いことを暗示する。

(十九) 対馬目高氏老の歌

「鶯」が登場するが、もはや、春の野の「鶯」ではない。「我家の園」は「自宅の庭」でなく、「春の野」に対して自分たちが今いる官邸の庭のことであ

ろう。宴の終了を惜しみ、眼前の庭に愛着を寄せる感じがよく出ている。

(二十) 薩摩目高氏海人

「我が宿の」とあるがこれも前と同じ旅人の官邸のことであろう。梅が散るのを惜しみ鳴く「鶯」は、この太宰府帥の官邸に招待された歓びと、宴の終わりを惜しむ気持ちの現れであろう。

(二十一) 土師氏御道の歌

御道、水道とも書かれている。無役でこの歌宴に参加しているだけ、万葉集に三首載せられている。彼の歌が重視されているのは唯一「都しぞ思ふ」の語句が出されていることである。太宰府での歌会であれば都を思う歌が作られて当然である。かえってそういう類の歌ばかりになる可能性もあるだけに参加者には一首タブーの題材であった。会の終わりに出るべき言葉が出たという意味で御道は重要な存在であったのだろう。

(二十二) 小野氏国堅の歌

国堅も同じく無役でこの歌会のまとめ役として参加している。突然「妹が家に」という言葉がでて一瞬戸惑いを覚えさせるが、会の幕引きと言うことから考えれば、旅人の官邸を恋人の家のように表現することでこの宴の参加者の気持ちを表現しているのである。雪が降るかのように梅の花が散る情景は御道の「都」と共に参加者の拍手喝采を得たことであろう。

(二十三) 筑前掾門石足

国司側の代表として最後を飾る。筑前掾であるから従七位上で無役の人たちと並ぶのは、地位からすれば変であるが、花宴の歌の締め括り役として上司の憶良の指名を受けたのであろう。歌は国堅の「妹が家」という表現に対応して旅人の官邸を「思ふ児」と表現し一段と強い共鳴の拍手を受けたと思

他に例がない語句である。梅を「君」というような恋人に見立てる表現を使っている。他に例を挙げてみると、それほど多くはない。

「招く」815 梅を「客人」に見立て「招いて」

「梅の花にもならましものを」819 梅の花になりたい

「君を思うと」831

「逢はむと思ひし梅の花」835 梅の花を恋人に見立て

「鶯懐けむと」837 鶯を人間に見立て

(十) 神司荒氏稲布

神司は大宰府「主神」の和風の表現。伝未詳。

「おりてかざせる」「楽しく」と梅の花より宴を楽しもうと言

う歌。梅の花を賞美するよりこの宴を楽しもうと言う花宴歌ならぬ宴会歌となっているのは次の歌である。

815 「楽しく終へめ」

紀卿

817 「縵にすべく」

栗田

820 「かざしにしてな」

葛井

821 「花をおりかざしのみて」

酒

笠沙弥

825 「青柳を縵にしつつ遊び暮らさな」

百村

828 「人毎に折りかざしつつ、遊べども」

丹氏

832 「おりてかざせる諸人は」

稲布

833 「梅をかざして楽しく飲まめ」

酒

宿奈麻呂

835 「今日の遊び」

高氏義通

836 「手折りかざして遊べども」

法麻呂

840 「縵におりし 盃の上に」

酒

老岐目

842 「あそびつつ」

高氏海人

843 「折りかざしつ諸人の遊ぶを見れば」

土師氏

846 「長き春日をかざせれど」

小野淡理

(十一) 大令史 野氏宿奈麻呂

小野臣宿奈麻呂か。そうすると、小野大夫、小野氏国堅、小野淡理の一族か。酒を飲んで楽しくやろうという前の歌をそのままうけている。歌は平凡でも、宴を盛り上げようという歌になっている。

(十二) 少令史田氏肥人の歌

野氏宿奈麻呂の「毎年に春の来たらば」を受けて「春来たるらし」と受ける。そして他の人の「鶯」に対し、「百鳥」と表現し、個性的な表現を出そうとしている。

(十三) 薬師高氏義通の歌

前の田氏肥人の「声の恋しき」を受けて「逢はむ」と詠む。歌としては平凡であるが、上手下手よりも、こうした歌の繋がりが一番楽しいものであったのだろう。

(十四) 陰陽師磯氏法麻呂

伝未詳。巻五の832の稲布以後は、歌の繋がりを作するために精一杯であるが、眼前の梅花の宴を楽しむ雰囲気は十分表現できている。

薬師高氏義通の「今日の遊び」を受けて、「飽き足らぬ日は今日にしありけり」と歌う。

(十五) 算師志大道の歌

志紀連大道。ここで歌が変化する。巻五827の若麻呂以来の「鶯」が登場する。しかも「春の野に鳴くや鶯」とこの歌で初めて庭の外の鶯を題材にした。庭の梅の花だけを題材に歌を作るのが難しくなってきたのであろう。ここでも「我が家の園」とあるが、今ままでと同じ旅との官邸ととり、「春の野」と「官邸の庭」を関連させ、後の庭の外の歌を引き出す働きをしている。

「春の野に」の歌は次の通りである。

8 2 3	百代	散らくはいづく	知良
8 2 4	奥島	散らまく惜しみ	知良
8 2 9	福子	咲きて散りなば桜花	知理
8 3 8	榎氏鉢麻呂	散り乱ひたる	知利
8 3 9	田氏真上	梅の花散る	知流
8 4 1	高氏老	咲きて散る見ゆ	知流
8 4 2	薩摩	散らまく惜しみ	知良
8 4 4	小野国堅	散るを使わずに表現	
8 4 5	門石足	散らずありこそ	知良

「梅の花咲くの例」

紀卿	咲くを使わず	(招く)	
小野	「今咲けること」	佐家留期等	
栗田	「咲きたる園」	佐吉多流	
憶良	「まづ咲く宿の」	佐久	
豊後	咲くを使わず	(咲いている前提) なりたい	
葛井	咲くを使わず	(咲いている前提) 今盛りなり	
笠沙弥	咲くを使わず	(咲いている前提) 散りぬともよし	
主人	咲くを使わず	(咲いている前提) 梅の花散る	
百代	咲くを使わず	(咲いている前提) 散らくはいづく	
奥島	咲くを使わず	(咲いている前提) 散らまく惜しみ	
百村	「咲きたる」	佐岐多流	
大原	咲くを使わず	(咲いているのを前提) 柳とわかむ	
若麻呂	咲くを使わず	(咲いているのを前提) 梅が下枝	
麻呂	咲くを使わず	(咲いている前提) 遊ぶ	
福子	「咲きて」「咲く」	佐企豆 佐久	
子音	「咲きわたるべし」	佐吉	
安麻呂	「うべも咲きたる」	佐枳多流	

稲布	咲くを使わず	(咲いている前提) おりてかざせる	
宿奈麻呂	咲くを使わず	(咲いている前提) 梅をかざして	
肥人	咲くを使わず	(咲いている前提) 今盛りなり	
義通	咲くを使わず	(咲いている前提) 相見つるかも	
法麻呂	咲くを使わず	(咲いている前提) 手おりかざして	
大道	「梅が花咲く」	佐久	
鉢麻呂	咲くを使わず	(咲いている前提) 散りまがひたる	
真上	咲くを使わず	(咲いている前提) 梅の花散る	
彼方	咲くを使わず	(咲いている前提) 誰か浮べし	
老	「咲きて散る」	佐伎豆	
海人	咲くを使わず	(咲いている前提) 梅の下枝に	
御道	咲くを使わず	(咲いている前提) 折りかざしつつ	
国堅	咲くを使わず	(咲いている前提) 咲く、散る	
石足	咲くを使わず	(咲いている前提) 散らずありこそ	
淡理	咲くを使わず	(咲いている前提) かざす	
	咲くを使った例は九首だけ		

(八) 筑前介佐氏子首

佐伯直子音か。懷風藻にも万葉集にも作品はない。筑後守葛井大夫以来の国司の登場である。従六位上で、大宰少監に相当だから、奥島、百村と同等である。また山上憶良の部下でもある。歌はあまり上手でないのか、決り文句以上は出ない平凡なものである。問題点としては他の全ての歌が一字一音で書いてあるのに、唯一例外として「万代」の「万よろづ」が使われている。

(九) 老岐守板氏安麻呂の歌

板氏連安麻呂。老岐守は下国のため筑前介より低い従六位下である。太宰府側で同位は大判事の丹氏麻呂である。彼の歌は前の佐氏子首に比べると個性的で上手である。「うべも咲きたる」「君を思うと夜眠も寝なくに」も、

と「我が宿の梅の花」という語句からは、確かに前の歌を受けている。そして一応ここで「柳」の歌を中断させている。ここからすれば大原は「柳」はいいから「梅の花」を詠もうと修正を呼び掛ける働きをしているともいえる。

(五) 少典山氏若麻呂

卷四・567では少典山口忌寸若麻呂とある。

若麻呂も（正八位上）で大原と同じく位階順より早く登場する。歌宴での働きは大原に似ている。大原は「柳」の歌を梅にもどす役割を果たした。若麻呂はこの梅花の宴に再び「鶯」を登場させる。

歌宴の中で、「鶯」を歌ったものは、以下である。

824	奥島	わが園の竹の林に鶯鳴くも	于具比須
827	若麻呂	木末隠れて鶯ぞ鳴きて	宇具比須
837	大道	春の野に鶯鳴くや	・隅比須
838	鉢麻呂	岡びには鶯鳴くも春方まけて	宇具比須
841	対馬目	鶯の音聞くなべに	于遇比須
842	薩摩目	鶯鳴く散らまく惜しき	宇具比須
845	筑前掾	鶯の待ちかてにせし梅が花	宇具比須

鶯を最初に詠んだ奥島は、824番で眼前の「竹の林」の「鶯」を詠んだ。ただし「竹の林」は二度と歌われない。単純に考えて「鶯」がたまたま「竹の林」にいたということとで「竹の林」には意味はないだろう。そして若麻呂は旅人の官邸の梅の梢で隠れて鳴く「鶯」を詠む。「鶯」の姿は見えないが、声だけが聞こえるという、一見「鶯」中心の歌のようであるが、よく見てみれば、若麻呂は、満開の旅人の庭の梅を眺めているのである。

(六) 大判事丹氏麻呂

丹氏麻呂は伝不詳。しかし大宰府大判事は、従六位下であるから前の大原や若麻呂より地位は上である。丹氏麻呂は、百村が「青柳をかづらにしつつ遊び暮らさな」と歌ったのに対し、梅を「折りかざしつつ遊びべども」と歌う。

その点では大原の歌が柳の歌を歌宴から排除したのを受けて、柳を「かづら」にするのではなく、「梅」を「かざして」と歌う。

丹氏麻呂	折り「かざし	・加射之」つつ遊びども
葛井大夫	「かざし	・加射之」にしてな
笠沙弥	折り「かざし	・可射之」
荒氏稲布	折りて「かざせる	・加射世留」
宿奈麻呂	梅を「かざし	・加射之」て楽しく飲まめ
法麻呂	手折り「かざし	・加射志」て遊びども
御道	折り「かざし	・加射之」つつ遊ぶ
淡理	長き春日を「かざせれど・可謝勢例杼」	
	梅の花を「めづらしき」と誉めたのはこの歌だけである。他に梅の花を誉めた表現を探してみると、意外に少ないのに驚く。	
828	「いやめづらしき梅の花かも」	
846	「いやなつかしき梅の花かも」	小野氏淡理

(七) 薬師張氏福子の歌

万葉にも懐風藻にも作品はない。あまり上手でないのか唐突に桜花を出しているが、桜を受けて歌う人はこの後無い。

薬師は、医師を和風に表現したもので、漢文の序の世界と和風の和歌の世界を明確に分けているのがわかる。

ここで「梅の花咲きて散りなば」という言葉を用いているが、梅の花が咲いている情景を前に詠んでいるのに、「咲く」という言葉は意外に少なく、九例に過ぎない。これに対して、「散る」と言う言葉は十二例となる。（ただし小野国堅は散るという言葉を使わないで梅の散る様子を表現している。）

「梅の花散る」の例

816	小野大夫	散り過ぎず	知利
821	笠沙弥	散りぬともよし	知利
822	主人	我が園に梅の花散る	知流

てあるはずだというのである。しかし大宰府の帥の官邸に招かれた部下が、主人の家の庭を差し置いて自分の家の庭の「竹の林に鶯鳴くも」とは歌えないだろう。

従って奥島の「我が園」の前の、小野大夫、旅人の例は言葉通り「自分の家」と解釈したが、奥島の場合は「私たちが今居る庭」と解釈した方がいいだろう。

816 小野大夫 「我が家の園に」 和我覇能會能爾

818 山上大夫 「まづ咲く宿の」 麻豆佐久耶登能

822 主人 「我が園に」 和何則能爾

824 奥島 「我が園の」 和我會乃々

奥島の和歌の前半のような、素直な主人旅人の歌の受け取りようからすれば、後半も、素直な眼前の句と、とるべきであろう。ここは、大胆な百代の受け方と、素直な奥島の受け取り方の対照の妙を評価したい。

そしてこの和歌から一連の「鶯」の歌が続く。奥島は眼前の鶯の姿を詠む。

(三) 少監氏土氏百村の歌

土師宿弥百村も、少監阿氏奥島と同じく万葉集にも懷風藻にも名はない。ただし、養老五年(721年) 憶良と共に、東宮(後の聖武天皇)に侍講しているので、漢学の教養は深いことがわかる。

前の百代と奥島が旅人の「我が園に梅の花散る」を受けたのに対して、百村は少武栗田大夫、笠沙弥で途絶えている、「青柳」を歌う。それも、栗田大夫の「梅の花咲きたる園の青柳は蔓にすべく」を、そのまま「梅の花咲きたる園の青柳を蔓にしつつ」と受ける。栗田大夫が、「できるほど」と予測を歌ったのに対し百村は現実化し「しながら」と歌う。こうして、栗田大夫の歌を受けることで彼に敬意を表したのである。歌の最後では、紀卿の「楽しく終へめ」、憶良の「春日暮らさむ」、葛井大夫の「かざしにしてな」、笠沙弥の、「青柳梅との花を」を受け、「かづらにしつつ遊び暮らさな」と歌う。歌としては目立つ作品ではなく栗田大夫の模倣の歌のようであるが、(注)

歌宴のそれぞれの歌の繋がりという面では重要な働きをしている。百村と栗田大夫の歌はよく似ているが、使われている万葉仮名も共通点が多い。

鳥梅能波奈佐吉多留僧能々阿遠也疑波可豆良尔(栗田)

鳥梅能波奈佐岐多流會能々阿遠夜疑遠加豆良尔(百村)

この二つを並べてみると、両者の歌の記録者が同一で会った可能性を示している。

(四) 大典史氏大原の歌

史氏大原は伝未詳、この花宴のみに名を残す無名の歌人だろう。前の三人が歌会で重要な位置を持つ歌を作っているのに対し、この歌は他の歌との関連からすると不明な点が多い。歌の順番も、大原は、「正七位上」であるのに、自分より高い職階の人より先に登場している。

まず「うちなびく」の問題。春にかかる枕詞とするもの、あるいは春の柳の実景とするもの(注2)と分かれる。「春の柳」とは、栗田大夫、笠沙弥、百村の歌から受け継ぐ。しかし彼の柳は前の三人と全く違う「柳」である。

栗田大夫 青柳が鬘にするぐらい芽が出ている

笠沙弥 青柳と梅 おりかざし

百村 梅の花咲きたる園を背景に青柳を鬘にして

大原 春の柳 わが宿の梅 いかにか分かつ

そして826番で大原が「柳」歌った後、840番の壹岐目の歌まで人々の歌から「柳」が消える。

ここでも「我が宿の梅の花」の「我が」が問題となる。「うちなびく春の柳」とは旅人の官邸をさすことに異論はない。そして「わが宿の梅の花」は、素直にとれば、わざわざ「我が宿」と断っている以上「自宅の梅の花」となる。しかし次の「いかにか分かつ」は、「柳」と「梅」をどうして分けようかという意味になる。そうなれば「柳」も「梅」も同じ所になければならない。すなわち「我が宿の梅の花」は百村と同じ旅人の官邸を指すことになる。

先に他の歌との関連が不明と書いたが、大原の歌は「うちなびく春の柳」

卷五823番から846番小野氏淡理の歌は下級の人たちの歌となっているが必ずしも地位順ではない。

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ
 梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林にうぐいす鳴くも
 梅の花咲きたる園の青柳を縋にしつつ遊び暮らさな
 うちなびく春の柳と我が宿の梅の花とをいかに別かむ
 春されば木末隠りてうぐいすを鳴きて去ぬなる梅が下枝に
 人ごとに折りかざしつゝ遊べどもいやめづらしき梅の花かも
 梅の花咲きて散りなば桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや
 万代に年は来経とも梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし
 春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜眠も寝なくに
 梅の花折りてかざせる諸人は今日の間は楽しくあるべし
 年のはに春の来らばかくしこそ梅をかざして楽しく飲まめ
 梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき春来るらし
 春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊びに相見つるかも
 梅の花手折りかざして遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり
 春の野に鳴くやうぐいすなつてむと我が家の園に梅が花咲く
 梅の花散り紛ひたる岡辺にはうぐいす鳴くも春かたまけて
 春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る
 春柳縋に折りし梅の花誰か浮かべし酒杯の上に
 うぐいすの音聞くなへに梅の花我家の園に咲きて散る見ゆ
 我がやどの梅の下枝に遊びつゝうぐいす鳴くも散らまく惜しみ
 梅の花折りかざしつゝ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ
 妹が家に雪かも降ると見るまでにここたも紛ふ梅の花かも
 うぐいすの待ちかてにせし梅が花散らずありこそ思ふ児がため
 霞立つ長き春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも

大監督氏百代
 少監阿氏奥島
 少監土氏百村
 大典史氏大原
 少典山氏若麻呂
 大判事丹氏麻呂
 薬師張氏福子
 筑前介佐氏子首
 老岐守板氏安麻呂
 神司荒氏稻布
 大令史野氏宿奈麻呂
 少令史田氏肥人
 薬師高氏義通
 陰陽師磯氏法麻呂
 算師志氏大道
 大隅目榎氏鉢麻呂
 筑前目田氏真上
 老岐目村氏彼方
 对馬目高氏老
 薩摩目高氏海人
 土師氏御道
 小野氏国堅
 筑前掾門氏石足
 小野氏淡理

(一) 大監督氏百代の歌

大監督氏百代は、大伴宿弥百代である。彼以後は名前が省略されていない。(すなわち敬称ではない)

天平十年外従五位下兵部少輔、同十三年美作守、同十五年筑紫鎮西府副將軍、十八年四月従五位下、九月豊前守、翌年正五位下となり、万葉集には、他に六首の歌が残されている。第二グループの最初の歌を引き受けるのにふさわしい人物と言える。

大伴百代の歌は直前の旅人の「わが園に梅の花散る」を、受けて、「梅の花散らくはいづく」と受ける。宴の歌の中でこの歌ほど前の歌と繋がっているものはない。まるで会話か、掛け合いのようである。

これは旅人があたかも眼前で梅が散ると言ったのをいとも簡単に否定して見せた歌である。そして城の山に雪が降っているのを見て、旅人の「ひさかたの 天より雪の流れ来るかも」を受けて「此の城の山に雪は降りつつ」と詠む。大胆な歌いぶりである。主人の旅人をいったん否定してみせた瞬間には、この歌宴に何ともいえない緊張感が走ったのではないか。しかし歌の後半で旅人の作り出した世界を具体的に描いてみせる。こうした点からも、この歌会が即興性を帯びた、互いの思いを交換してみせる歌会だったことを示している。

そして旅人によって、ピリオドが打たれたような歌会は百代によって、再開される。

(二) 少監阿氏奥島の歌

安倍朝臣息島か。彼の名は懷風藻、にも万葉集にもない。大伴百代と違い少監阿氏奥島は旅人の歌を素直に受ける。旅人の「わが園に梅の花散る」に対し、「梅の花散らまく惜しみ」と受けるのは、旅人の描いた空想の世界をそのまま享受し、眼前の竹の林の鶯を歌う。ただしこの「わが園」に関して少監阿氏奥島自身の家の園という立場の人も多い。この歌が、旅人の官邸であるなら、「この園」、「君が家の園」「この宿」「君が家」などと表現し

この歌には何か違和感を覚える。それは、この歌には前の七人の歌にあった、宴を盛り上げようとする「心」が、かけらも窺われないということである。冒頭の紀卿の歌は客の立場より招いた側の挨拶のような内容であることは前に述べた。旅人にはその挨拶の心がないのだ。確かに旅人の歌は優れている。だが宴の歌としてどうかであろうか。

葛井大夫が「今盛りなり」と歌い、笠阿弥が「飲みての後は散りぬともよし」と歌ったのは、どちらも宴はこれからだという思いを込めて歌ったものである。こうしてせつかく盛り上がった宴に「梅の花散る」と歌ってしまえば、突然ピリオドを打ったのと同じ感じを受けるのは私だけであろうか。ただ旅人で第一段階の歌会が終了したと考えれば、逆に会の終わりを告げる見事な歌ということになる。主人と賓客の歌はここで終わる。高官達は、それぞれ流の漢学の教養の持主であり、ある者は漢詩を作り、ある者は和歌を作る。

こうした人々のハーモニーは宴の参加者に感銘を与えたと思われる。歌宴は引き続き多数の参加者による第二段階に入る。

注1 小学館日本古典文学全集萬葉集(巻二) 68頁〜70頁

注2 ただし萬葉集注釋では作者不明としている。

注3 日本古典文学大系 懷風藻他 岩波書店 136頁

大宰大式正四位下紀朝臣男人 三首

七言 遊吉野川 一首

萬丈崇巖削成秀 千尋素濤逆折流

欲訪鍾池越潭跡 留連美稻逢槎洲

五言 屬從吉野宮 一首

鳳蓋停南岳 追尋智與仁 嘯谷將孫語 攀藤共許親

峰巖夏景變 泉石秋光新 此地仙靈宅 何須姑射倫

五言 七夕 一首

懷鼻標竿日 隆腹・書秋 鳳亭悦仙会 針閣賞神遊

注4 日本古典文学大系 懷風藻他 岩波書店 508頁

詩人小伝によれば、天平十年十月(歌会の八年後)、その時と同じ、正四位下大宰大式で亡くなっている。この点から別人説も出ている。

注5 小学館日本古典文学全集萬葉集(巻二) 448頁

注6 萬葉 吉永 登 18頁

注7 萬葉集注 89頁

注8 筑摩書房 日本詩人選4 大伴旅人・山上憶良35頁〜41頁

注9 小学館日本古典文学全集萬葉集(巻二) 333頁

卷四・576 大宰帥大伴卿上京之後、筑後守葛井連大成悲歎作歌一首

從今者 城山道者 不樂牟 吾將通常 念之物乎

今よりは城の山道は さぶしけむ 我が通はむと 思ひしものを

小学館日本古典文学全集萬葉集(巻二) 167頁

卷六・1003 筑後守外老五位下葛井連大成、遙見海人釣船作歌一首

海嬌 玉求良之 奥浪 恐海爾 船出為利所見

海人娘子 玉求むらし 沖つ波 恐き海に 舟出せり見ゆ

注10 日本古典文学大系 懷風藻他 岩波書店 510頁

II 梅花の歌宴その二

「正月」「春」「梅」「園」「柳」「かづら」「かざす」「宿」「独り」「世の中」「恋」「散り」「天より雪」と旅人の官邸の庭の梅を題材に思い思いに、歌は詠まれた。高官たちの後の歌人は一部を除き無名の人たちである。最初は大監伴氏百代の歌。まとめ役ないし世話役は筑前掾門氏石足と、無役でも歌に自信のある、土師氏御道、小野氏国堅、小野氏淡理である。この歌宴のみに名前を残す人たちにとって、正月の、春の日に、大宰帥大伴旅人の官邸に招かれ、高官達と満開の梅を前に歌を詠み、その歌が全て万葉仮名で記録されていく。それだけで、大きな歓びと感激であつたろう。

心を率直に詠んだのであろうか。七十一歳の憶良がそこまで礼儀知らずに振舞ったであろうか。すなわち前の栗田大夫が精一杯宴を盛り上げようとしているのに、国司側の最初の歌で歌宴に水を差すような歌を作るとは思えない。とすれば、素直に宴を喜び盛り上げる歌と理解したほうがよい。

伊藤氏の「萬葉集釋注」でこの憶良の歌を「ひとり見つは、二年前妻の大伴郎女を失った旅人の孤独な心境を詠んだもの」(注7)とあるが、花宴という場を考えれば、旅人にだけ通じるような歌は詠まれなかったと思われる。また歌宴の憶良の歌から高木市之助氏のように旅人への「反撥」(注8)を読み取るのも正しくない。確かに旅人と憶良には性格の違いがあるが、こうした宴では協力者であつたに違いない。

(五) 豊後守大伴大夫の歌

旅人と同じ大伴氏であるが、誰を指すか不明である。「世の中」も「恋」繁し」も初出で、以後もこの語句はない。憶良の「独り見つ」に恋の歌を読み取つたのであろうが、唐突の感は否めない。ただ「梅の花にもならましものを」という梅の賛美は新鮮である。864番の吉田宜の歌は(後れ居て長恋せずは、み園生の梅の花にもならましものを)という恋歌仕立てで奈良の都から旅人の官邸の庭の梅になりたいと大伴大夫と同じような歌を詠んでいる。

憶良の「独り見つつも」大伴大夫の「梅の花にもならましものを」の歌は共に他の人たちに引継ぎ歌われない。その点では何か孤立した感じを与えるが、この二人の歌を、前の歌と同じ宴を盛盛り上げる挨拶の歌ととれば、憶良の歌は、「独り寂しくなんてやめて、楽しくやろう。」という歌宴賛歌となり、大伴大夫の歌は「恋に沈んで寂しく物思いに沈むより、こんな美しい梅になって楽しもう」という優れた梅の賛歌となる。

(六) 筑後守葛井大夫の歌

葛井連大成である。万葉集卷四576、卷六1003(注9)の二首の歌を

残す。懷風藻の詩人小伝(注10)によれば、葛井氏は、初めの姓は白猪史で、養老三年(731年)広成が大外記従六位下で遣新羅使に任ぜられ、葛井連の姓を賜う、とある。万葉集に三首、懷風藻に、漢詩二首、経国集にも対策文を残している。天平三年に外従五位下、備後守とある。ここから見ると大成と広成を兄弟と見れば、大成も漢学の教養が深かったと思われる。

前の恋歌の仕立てを「思ふどち・思う同志」で受け、眼前の梅に目を向けるために「今盛りなり」を繰り返して詠むという巧みさを見せている。

(七) 笠沙弥の歌

沙弥満誓、俗名笠朝臣麻呂、養老元年、四位上、養老五年元明上皇の病氣平癒を願ひ出家、養老七年大宰府筑紫觀世音寺を作る長官として下り、天平初年まで同地にとどまる。万葉集に他に六首の歌がある。無位ではあるが、出家前の地位は旅人について高く、賓客の席に招かれたのであろう。高い地位を捨て出家して、なお伸び伸びとした歌を詠む満誓は旅人の心から信頼を寄せる友であつたろう。

眼前の梅と、栗田大夫の詠んだ「青柳」を歌い、出家の彼が「飲みての後には散りぬともよし」と乾杯の宣言をする。また前の小野大夫の「散り過ぎず受けて「散つてもいい」と高らかに歌う。笠沙弥は小野大夫と共にこの歌会を代表する歌人であつた。この歌が、印象的であつたことは、梅花の宴の時、旅人の官邸に滞在していた坂上郎女に次のような歌が残されていることからわかる。

卷八1656 酒杯に梅の花浮かべ思ふどち飲みての後は散りぬともよし

(八) 主人の歌

主人は大伴宿弥旅人である。名門大伴氏の統率者であり、万葉集に多数の歌を残し懷風藻にも漢詩一首を残している。旅人の歌はこの花宴の三十二首の中でも、最も高く評価されている。漢文の序の精神を忠実に受取り、正月十三日(旧暦)に早くも雪が降る落梅の姿を歌う。しかし旅人の歌をよく見てみると、

841 対馬目 「我ぎ家の園に」 和企弊能會能尔
842 薩摩目 「我が宿の」 和我夜度能

「我」を自宅と解釈 「我」を官邸と解釈

武田祐吉 萬葉集全注釋 佐々木信綱 評釈萬葉集
澤瀉久孝 萬葉集注釋 土屋文明 萬葉集私注
岩波古典大系 萬葉集 佐々木・武田 萬葉集総釈
金子元臣 萬葉集評釈 *澤瀉久孝氏萬葉集注釋は
窪田空穂 萬葉集評釈 816は官邸

(三) 少弐栗田大夫の歌

栗田朝臣人、栗田朝臣人上とも言われるが、彼の歌はこれ以外万葉集にも懐風藻にもない。素直に前の歌を「梅の花」と受け、眼前の「青柳」を詠み、無難な挨拶の歌にしている。三十二人もの人による花宴は、当然歌のそれ程得意でない人の歌も含まれる。旅人は栗田大夫の歌をそのまま記録したのか、手を入れたのか、ここからだけでは判断は難しい。栗田大夫が詠みはじめた「青柳」はこの後次々と受け継がれていく。柳を題材にした歌は次の歌である。

栗田大夫 梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべく
笠沙弥 青柳梅との花をおりかざし
百村 梅の花咲きたる園の青柳を
大原 うちなびく春の柳とわが宿の梅の花
彼方 春柳かづらのおりし梅の花

ここから「青柳」が実景であることがわかる。また栗田大夫の「かづら・かざす」を受け継いでいる歌も多い。

817 栗田大夫初出 「かづらにすべく」 可豆良
820 葛井大夫 「かざしにしてな」 加射之
821 笠沙弥 「おりかざしてのみ」 可射之
825 少監百村 「かづらにしつつ」 加豆良

828 丹氏麻呂 「人毎に折りかざしつつ」 加射之
832 神司荒氏稻布 「おりてかざせる」 加射世留
833 野氏宿奈麻呂 「梅をかざして」 加射之弓
836 磯氏法麻呂 「手折りかざして」 加射志弓
840 老岐目彼方 「かづらにおりし」 可豆良
843 土師氏御道 「かざしつつ」 加射之
846 小野氏淡理 「かざせれど」 可謝勢例

(四) 筑前守山上大夫の歌

山上憶良である。この花宴の時、七十一歳となっていた。三十二人の歌宴を成功させる為には、それ程歌が達者ではない人の前後が大切である。栗田大夫が無難に詠んだ後、憶良は前の三人と違う歌を詠む。花魁と称され、春に先がけて咲く梅の花。その梅が咲く「宿」を「皆がいるこの宿」とするか、「我が宿」とするかで、この歌の意味が変わる。二番目の歌で、小野大夫が「我が家の園」と詠んでいる以上「宿」とあれば、旅人の官邸とするのが当然である。

しかしこの歌の後半「独り見つや春日暮らさむ」との関連で見ていくとこの問題は一層複雑になる。問題点を整理すると次の様になる。

① 「我が宿」とした場合

春になると咲く「我が家の梅の花」を独り見ながら春の日を暮らそうか。
(こんな派手な宴会は遠慮したい) 宴に溶け込めない孤独
反語ととって(独りは寂しいからこの宴を楽しもう)

② 「皆のいるこの宿」とした場合

春になると咲く「この歌宴の庭で梅の花」を独り見ながら暮らそうか。
宴に溶け込めない孤独感
反語ととって(それは寂しいから花宴を楽しく過そう)

「宿」を自宅、官邸と解釈しても、それぞれ正反對の解釈が生まれる。
宴に招待されながら、「罷宴歌」を作った憶良らしく、宴になじめない

しか使われない言葉もある。

「一回だけしか使われていない語句」

8 1 5	大式紀卿	正月 招く
8 1 8	筑前守山上大夫	独りの 暮らさむ
8 1 9	豊後守大伴大夫	恋繁し
8 2 2	主人	ひさかたの 天より
8 2 3	大監伴氏百代	いづく しかすがに 城の山
8 2 4	少監阿氏奥島	竹の林に
8 2 6	大典史氏大原	うちなびく いかにか別かむ
8 2 7	少典山氏若麻呂	木末隠りて去ぬなる 下枝に
8 2 8	大判事丹氏麻呂	人ごとに めづらしき
8 2 9	薬師張氏福子	桜花継ぎて なりにてあらずや
8 3 0	筑前介佐氏子首	万代に年は来経とも 絶ゆる
8 3 1	杵岐守板氏安麻呂	うべも 君を 夜眠も寝なくに
8 3 2	神司荒氏稻布	諸人は今日の間はあるべし
8 3 3	大令史野氏宿奈麻呂	年のはにかくし
8 3 4	少令史田氏肥人	百鳥の 声の恋しき
8 3 5	薬師高氏義通	逢はむと相見つる
8 3 6	陰陽師磯氏法麻呂	飽き足らぬ
8 3 7	算師志氏大道	なつてむと
8 3 8	大隅目楨氏鉢麻呂	紛ひたる岡辺 かたまけて
8 3 9	筑前目田氏真上	霧立ち渡り人の見るまで
8 4 0	杵岐目村氏彼方	浮かべし 酒杯の上に
8 4 1	対馬目高氏老	音聞くなへに 散る
8 4 2	薩摩目高氏海人	散らまく惜しみ
8 4 3	土師氏御道	諸人の都しぞ
8 4 4	小野氏国堅	妹が家にここだも紛ふ
8 4 5	筑前掾門氏石足	ちかてにせし 児がため

8 4 6 小野氏淡理

霞立つ長き春日なつかしき

(二) 少式小野大夫の歌

二番目の歌は大式紀卿の挨拶の歌を受け、「今咲けること」と眼前の梅を歌い、主人の旅人の梅園を誉めたたえる挨拶の歌になっている。

ところで、少式小野大夫は、小野朝臣老であることは定説である。彼は大式紀卿のように懐風藻に、作品はないが、巻六958に「時つ風 吹くべくなりぬ 香椎潟 潮干の裏に 玉藻刈りてな」という歌を残している。和歌系の人といえるだろう。特に巻三の328「あをによし 奈良の都は咲く花の薫るがごとく今盛りなり」という有名な歌を残しており、冒頭に漢詩の代表と和歌の代表を意図的にならべたのであろう。小野朝臣老は天平九年(歌宴七年後)大宰大式従四位下で大宰府で没している。(注5)

問題は「わが家の園」という言葉である。常識的に考えて、「我が家の庭で咲いてください」となるはずであるが、見解が分かれている。(注6)冒頭二番目に、たとえ、自分の家の庭には、梅の花がない事を謙遜しているにしても、旅人の官邸の庭の梅を賞美するために、「我が家の園に ありこせぬかも」という表現は、面白味あつても、やはり失礼な感があるからであらう。「わが家の園」を旅人の官邸ととれば、「私達の今いるこの庭の梅がいつまでも咲いていて欲しい」となり、挨拶の歌としては自然である。しかし歌とすればあまりにありきたりのものになってしまう。

ここは、「我が家の園」を素直に小野老の自宅の庭と、するべきであらう。ただこの歌以後に現れる、「我が園」「我が宿」の解釈について問題はある。六首の「我」について

8 1 6	小野大夫	「我が家の園に」	和我霸能曾能爾
8 2 2	主人	「我が園に」	和何則能爾
8 2 4	奥島	「我が園の」	和我曾乃々
8 2 6	大原	「我が宿の」	和我夜度能
8 3 7	大道	「我が家の園に」	和我弊能曾能爾

注2 日本古典文学全集萬葉集(卷二)小学館 67頁〜68頁

注3 大伴旅人 人と作品 中西進編 おうふう 林田正男

大宰府時代の生涯 66頁〜67頁

王羲之「蘭亭集序」と「梅花の序」の比較を次のようにされている。

「蘭亭集序」 永和九年歲在癸丑、暮春之初、会于山陰之蘭亭、修禊事也。

是日也、天朗氣清、惠風和暢、……

天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴會也。

「梅花の序」

也。

于時、初春令月、氣淑風和、……

「蘭亭集序」

「梅花の序」

注4 澤瀉久孝萬葉集注釋 卷第五98頁〜99頁

注5 金子武雄 万葉大伴旅人 公論社 70頁

三、花宴の歌三十二首

卷五815番から822番までは、賓客に相当する。そのため、八番目の822番に主人大伴旅人の歌をおいている。冒頭の歌は主人大伴旅人を除く最高位の大式紀卿がつとめる。

I 梅花の宴その1 (主人、賓客の歌)

815 正月立ち 春の来たらば かくしこそ 梅を招きつつ 樂しきをへめ

大式紀卿

816 梅の花 今咲けること 散り過ぎず 我が家の園に ありこせぬかも

少弐小野大夫

817 梅の花 咲きたる園の 青柳は 縷にすべく なりにけらずや

少弐栗田大夫

818 春されば まづ咲く宿の 梅の花 ひとり見つや 春日暮らさむ

筑前守山上大夫

819 世の中は 恋繁しゑや かくしあらば 梅の花にも ならましもの

豊後守大伴大夫

820 梅の花今盛りなり思ふどち かざしにしてな 今盛りなり

筑後守葛井大夫

821 青柳 梅との花を 折りかざし 飲みての後は散りぬともよし

笠沙弥

822 我が園に 梅の花散る ひさかたの 天より雪の流れ来るかも

主人 (注1)

(一) 大式紀卿の歌

花宴の最初を飾るのにふさわしい挨拶の歌である。まず、「正月」であることを告げる。後の歌に「正月」と言う言葉が出てこないのは、歌宴の参加者はこの歌を受けて詠んだ根拠になるだろう。「梅を招く」と言う言葉は、いかにも春に先駆けて咲く梅の花を「擬人法」を用いて見事に表現している。ただこの歌には招かれた客の挨拶と言うより主催者の挨拶のような歌になっている。大宰府の高官として、大宰帥大伴旅人に招待されたと言う意識がなかったのかもしれない。あるいは歌宴の最初の歌ということを考えてのものである。

大式紀卿は紀朝臣男人のことと言われているが(注2)そうだとすれば、万葉集には、この一首だけで、後は懷風藻に漢詩を三首(注3)残している。養老五年山上憶良と共に東宮侍講となっており、当時一流の漢学者であった。和歌の作者として知名度は高くないが、漢詩で有名な紀卿を冒頭に迎えての歌宴は、漢倭新文学にふさわしいものである。彼がこの歌会に参加したのは49歳であるが、彼は若きエリートであったことになる。(注4)

三十二人もの多数によって開かれた歌会で、「梅」を題材に詠めば、当然語句が重なる。例えば「梅の花」という、語句は「梅」を含めると、全ての歌に使われている。一方「正月」、「招く」のように、その歌だけ一回限り

この序文については契沖が「万葉代匠記」で指摘しているように、王羲之の「蘭亭集序」や王勃・駱駝賓王などの初唐詩序を学んだものとして、詳しく比較研究されている。(注3)

序文が多く中国の漢文の文章を借りて成り立っているとすれば、文章が第一で、内容は二の次かもしれないが、内容を一応確認しておく。

①「天平二年正月十三日、葦于師老之宅、申宴会。」

この内容は事実であるが、問題は「師老之宅」である。敬語とすれば、この序文の作者は旅人ではない。謙遜した表現とすれば自称となつて旅人の作品となる。

②「梅披鏡前之粉、蘭薫珮後之香。」

この部分をそのまま、解釈すれば、「梅の花は鏡の前の白粉のように白く咲き、蘭は飾り袋のように薫る」となるが、三十二首の歌には、梅の花は歌われているが、蘭は歌われていない。蘭の花などはこの宴になかったことがわかる。序文が歌会の後に作られたか、全くの机上の作文であることを示す。そして、

③「曙 嶺 雲 松 夕 霧 鳥 林 庭 新 蝶 空 故 鴈」

と春の情景を描写していくが、三十二首の歌と一致しているものは、「雲 霧 鳥 空 庭」だけで②の説明を証明している。

④「盖天坐地、促膝飛觴」

では、屋外での酒宴の様子を示しており、これは三十二首の歌と一致する。

「詩紀 落梅之篇、古今天何異矣。宜賦園梅、聊成短詠。」

(口訳 いにしへにも梅花散る詩篇がある。昔も今も何の違ひがあろうぞ。吾々もよろしくこの園の梅を詠じていささか短歌を成すべきである。)(注4)

ここで「詩紀」を「請紀」とする説もある。(注5)こう解釈すると、「落梅の編をしるそう」となる。梅花の宴の歌の中で、「落梅の歌」は822番の旅人の歌から、823番、824番、829番、838番、839番、841番、844番の八首である。花宴の歌が、序の呼びかけにどれだけ応じたのか、序文と無関係に歌が作られたかどうかは、これだけでは不明である。

結論として、序文の内容から考えて、歌宴の参加者には、序文に相当する内容に近いものが、口頭で発表されたかもしれないが、それは伝えられていないので、ないものとするしかない。そしてこの漢文の序文は花宴の歌の一部として、後から追加されたものと考えられる。

(二) 漢詩、漢文と和歌の関係

万葉集後、和歌は小島憲之氏が言われる国風暗黒時代を迎える。伝統的な和歌が漢詩に圧倒されその力を失った時代のことである。律令制度が確立していくにつれ、男たちは漢文という外国語の学習に励むようになる。その先駆的人物が、旅人への漢文の書状を残している吉田宜であり、四十二歳まで無役で、遣唐使の一員となった山上憶良であり、六十歳まで和歌を残さなかった大伴旅人であった。

和歌は文字のない時代、人々の生活にとって、大切な存在であった。喜び、悲しみ、怒り、恐れ、戦い等の、あらゆる生活は全て歌と共にあり、多くの人たちにより生み出され継承されていった。無論作者は無名の人々であった。中国から「漢字」が伝えられ、和歌は記録され洗練され磨かれた。歌は人々のものであったが、文字は一部の特別な人々のものであった。文字のない時代人々と共にあった歌は、文字によって人々の手を離れ、無名の人々の歌に文字を持つ権力者の名が付けられた。

そして和歌のレベルが一層高くなると、和歌の専門家である柿本人麻呂や、山部赤人のような宮廷歌人が誕生した。数多くの優れた和歌が作られ万葉仮名によって一字一音正確に書きとめられた。和歌は万葉仮名という文字によって発展して行った。一方法律(文)によって政治を行う律令制が進むにつれ、多くの文章の専門家(官僚)を必要とした。文章は和歌と違い、背後に巨大な文化を持つ漢文が採用された。外国語である漢文を自由に扱う人々が増えることは、漢詩の存在が大きくなっていくこと意味していた。つまり和歌が漢詩によって脅かされることを意味した。

注1 伊藤博「万葉集の表現と方法・上」漢倭混淆文

に送られた。巻五の863の歌の後に、吉田宜の手紙が載せられている。吉田宜によって漢文で書かれた手紙の原文は以下である。

宜啓。伏奉四敝敝月六日賜書。跪開封函、拝読芳藻。(途中略) 到若羈旅、邊城、懷古而傷志、年矢不停、憶平生而落淚。(途中略) 伏冀朝宣懷・之化、暮存放龜之術、架張趙於百代、追松喬於千齡耳。兼奉垂示、梅苑芳席、群英・藻、松浦玉潭仙媛贈答、類杏壇各言之作、疑衡臯稅駕之篇。耽讀吟諷、戚謝欽拾。(途中略) 孟秋膺節、伏願万祐日新。今因相撲部領使、謹付片紙。宜謹啓、不次。(注5)

この手紙によれば、正月十三日に作られた「梅花の宴」の歌は、四月六日に大宰府から発送され、奈良の都に、七月七日到着している。そしてこの書状の日付は、天平二年七月十日となっており、吉田宜が直ちに返事を書いたことがわかる。旅人の吉田宜への書状は消滅しているが、旅人宛の書状は保存され万葉集に載せられた。

また手紙は梅花の宴が開かれてから、三ヶ月近くも経って吉田宜に送られている。空想の宴であれば、もつと梅花の宴にふさわしい時期に変更することも可能であったし、時期設定も自由で、当然梅の満開期を選んだであろう。天平二年正月十三日は暖冬であって、時ならぬ梅の満開によって開かれた花宴と見るべきであろう。また、この宴が現実に関開かれたからこそ、吉田宜は花宴の歌に新鮮な感動を受けたのである。

第二点は、参加者の偏りである。大宰府の官人も、無役の者が三名もあり、国司の場合も豊前、肥後、肥前からの出席者が欠けている。こうした宴の出席者の偏りは、梅花の宴が呼びかけられて、人々が集まったのではなく、何かの集いの余興として開かれた可能性が強いことを示している。(注6)すなわちこの歌会があらかじめ準備されたものではなく、たまたま暖冬で梅の開花が早まったことから生じた催しとりたい。参加者は予め歌を準備することは不可能であったと思われる。結論をまとめると、次の様になる。

一、梅花の歌宴は三十二名の参加で旅人邸で開かれた。

二、歌宴は梅の花の満開のもとで開かれた。

三、歌宴の参加者は目前の梅の花を題材に次々と即興の歌を詠んだ。

四、宴会と違い歌宴は予め予定されていたものでなく、急遽開かれたものである。

注1 官職、位階は小学館日本古典文学全集萬葉集(巻二)524頁

「萬葉集釋注三」84頁 集英社を参考

注2 岩波書店古語辞典土田直鎮官職制度の概観1464頁

注3 国文学 解釈と教材の研究第19巻6号 木下正俊「旅人 自然と孤独」

注4 都留文科大学研究紀要第9号 大久保広行「梅花の宴歌群考」

注5 小学館日本古典文学全集萬葉集(2)81頁〜83頁

注6 藤原芳男「梅花の歌」国語研究第28号 (この梅花の宴を養老このかた盛んになった詩宴流行の風に乗じて管下の文雅文人を擢で催した大伴旅人の詩宴のための詩宴であったと見るならば、恐らくは、當を得ないであらう。)

(かくて私はこの梅花の宴は多端な政務の間に催された一日の清遊であり、梅花の歌はこの集ひにあつては必然的にその座興に於て生じたものであったと見る。)

二 序文について又は「漢倭混淆の新文学」(注1)

(一) 漢文の序の意味

この花宴の歌には次のような漢文による序文がつけられている。

序文(原文)

梅花歌卅二首并序

天平二年正月十三日、萃于師老之宅、申宴会。于時初春令月、氣淑風和。梅披鏡前之粉、蘭薰珮後之香。加以曙嶺移雲、松掛羅而傾蓋、夕岫結霧、鳥封而迷林。庭舞新蝶空帟故鴈。於是、盖天坐地、促膝飛觴。忘言一室之裏、開衿煙霞之外。淡然自放、快然自足、若非、翰苑、何以・情。詩紀、落梅之篇、古今夫何異矣。宜賦園梅、聊成短詠。(注2)

大宰府師	(正三位)	主人	(大伴旅人)
大宰府大貳	(從四位下)	紀卿	(紀朝臣男人)
大宰府少貳	(從五位上)	小野大夫	(小野朝臣老)
大宰府小貳	(從五位上)	栗田大夫	(栗田朝臣人)
大宰府大監	(正六位下)	伴氏百代	(大伴宿弥百代)
大宰府少監	(從六位上)	阿氏奥島	(安倍朝臣奥島)
大宰府少監	(從六位上)	土氏百村	(土師宿弥百村)
大宰府大判事	(從六位下)	丹氏麻呂	
大宰府大典	(正七位上)	大典史氏大原	
大宰府神司(主神)	(正七位下)	荒氏稻布	
大宰府少典	(正八位上)	山氏若麻呂	
大宰府薬師(医師)	(正八位上)	張氏福子	・高氏義通
大宰府陰陽師	(正八位上)	磯氏法麻呂	
大宰府算師	(正八位上)	志氏大道	
大宰府大令史	(大初位上)	野氏宿奈麻呂	
大宰府少令史	(大初位下)	田氏肥人	
無位 笠沙弥	(從四位上で出家)	造筑紫觀世音寺別当	
無位 土師氏御道	小野氏国堅	小野氏淡理	以上二十一名
国司			
筑前守	(從五位下)	山上大夫	(山上憶良)
豊後守	(從五位下)	大伴大夫	(不明)
筑後守	(外從五位下)	葛井大夫	(葛井連大成)
筑前介	(從六位上)	佐氏子首	
老岐守	(從六位下)	板氏安麻呂	
筑前掾	(從七位上)	門氏石足	
筑前目	(從八位下)	田氏真上	
大隈目	(大初位下)	榎氏鉢麻呂	
薩摩目	(大初位上)	高氏海人	

老岐目 (小初位上) 村氏彼方
 对馬目 (小初位上) 高氏老 以上十一名 (注1)

「梅花の宴の歌」は、大体身分順で記載されているとされているが、確認の意味で「梅花の宴」に歌を寄せた人達をまとめてみた。これで見ればあらゆる面で優遇措置が受けられる(注2)五位以上の位階を持つものは三十二名中七名だけである。ただし笠沙弥は出家前從四位上であつたが、残り二十四名は、下級官僚といつてよい。つまりこの歌宴は奈良の都の貴族たちによる歌宴とは少し違ふ、本当に歌好きとされる人達によつて開かれた可能性が強い。

さてこれだけ多くの人数の歌宴は上代の文献にはない。日時、場所は万葉集巻五に「梅花歌卅二首并序」として明らかにされている。ただこれだけの人数でしかも大宰府という都から離れた場所で酒宴ならともかく、歌宴が開けたかどうか疑問とする考えもある。実際集まつたのは一部の者で後は、人々から寄せられた歌と、旅人の空想によつて作られたと言う考えもある。(注3)

また現在の大宰府天満宮の梅の満開が三月上旬であることから、旧暦正月十三日(二月八日)では早すぎて梅の満開や、落梅を歌つた花宴の歌が嘘になつてしまふ。こうした疑問に対して梅は咲いていたとする調査もある。(注4)

こうした歌宴への疑問をまとめると、「はじめに」の内容と重なるが次のようになる。

(1) 実際には花宴などなく、大伴旅人の空想の会であつた。

(2) 梅の満開には早すぎる、梅のない歌会だつた。あらかじめ準備した梅の歌を読んだだけである。

(3) 仮に暖冬で梅が咲いて宴会があつたとしても、即興で歌を詠み合うなど不可能で、寄せられた歌を旅人によつて編集されたものである。

以上のような花宴の歌への疑問や考え方に対して、私は、普通より早く開花した梅の花を前にした大宰府の人たちが、自然発生的に開いた会であると思う。その根拠として二点挙げてみる。

第一は同時代の評価である。梅花の宴の歌はこの後、奈良の都にいた吉田宜

万葉集卷五梅花の宴の歌について

梶田隆之

はじめに

「梅花の宴の歌」は、奈良の都を遠く離れた大宰府で、三十二人もの参加者によって、当時はまだ珍しい舶来の梅を題材に作られた。花宴の主催者は大伴旅人、参加者の中に、山上憶良や、筑紫歌壇で知られた、少弐小野大夫、笠沙弥等の名前がある。

参加者が即興で自由に歌を詠めたのかという疑問から、金子武雄氏は、「これらの作者は、あらかじめ旅人に招かれ、当日梅の歌を誦詠するように求められ、作って用意しておいて、逐次その席で披露したのであらう。」(注1)と書かれている。澤瀉久孝氏の「万葉集注釋」のように「梅花の宴の歌」に対して「以上卅二首特にすぐれたものと思はれるものは少く、所謂お座なりの作の多いことは誰でも認めるところであるが」と述べられその歌群の価値を一蹴されている。(注2)

この花宴の歌に対し、最初に評価の声をあげたのは、土居光知氏である。氏は「古代伝説と文学」所収の論文「万葉集卷五について」(注3)で三十首の歌の有機的な相互関係を推測された。土居氏の見解には大きな反響があったが、疑問も多く出された。土居氏の見解を發展させた伊藤博氏は、「三十二首は、天平二年(730)正月十三日、大宰府旅人宅において、本質的に、見られるとおりの風雅を達成したと考えてよい。三十二人が相継いで詠をなして、乱れぬ体系を完結した。これは驚くべき営みである。万葉集はここまですべて発達しており、それは、人間が集団として生きる場合の、生きざまの貴重な規範ともなるであらう。」と絶賛されている。(注4)

こうした歌群への評価とは違った角度で捕らえる意見もある。高木市之助氏は、この花宴での、憶良と旅人の歌に注目し、「憶良と旅人の反撥」の指摘をされている。(注5)憶良と旅人の関係を、互いの才能を認め合う、同志的な結びつきとするか、高木氏のように両者の「文学的反撥」がより豊かな作品を作り上げたと考えるかでは、両者の作品理解に大きく影響を与える重要な問題である。

他にもこの花宴に対する考察がなされているが、(注6)具体的な作品を通して、論及してみたいと思う。

注1 「万葉 大伴旅人」 公論社 75頁

注2 「萬葉集注釋 卷五」 中央公論社 146頁

注3 「土居光知著作集2」 岩波書店

注4 「萬葉集注釋 三」 集英社 116頁

注5 「日本詩人選4」 筑摩書房31頁

注6 原田貞義「梅花三十二首の成立事情」万葉第五七号

吉永登「梅花の歌三十二首に見える『我』について」万葉 第六二号

大久保広行「梅花の宴歌群考」都留文科大学 研究紀要 9

後藤和彦「梅花の歌三十二首の構成」

万葉を学ぶ4 有斐閣

植垣節也「梅花の歌三十二首考」

古典解釈論考 和泉書院

一 梅花の宴について

天平二年(730年)、正月十三日(太陽暦二月八日)、梅花の宴が大宰帥大伴旅人の官邸で開かれた。

参加者は大弐以下府の官人、二十一名(笠沙弥を含む)と国司十一名で参加者は以下の通りである。

大宰府官人